

《佐藤 慧》氏

グリーンを抱えて生きる～世界の紛争地・被災地の現場から～

## はじめに

僕自身が各地で撮影してきた写真を皆さんに見ていただきながら、グリーンというのは一体どういうものなのか、そして、僕自身は自分の中でグリーンと向き合う中で何を考えてきたのか、お話ししたいと思います。

## 紛争地の現場から

ここにシリアのラッカという街の写真があります。この街は、いわゆる武装勢力にしばらくの間占領されました。どのような大義があっても、戦争は奪われてしまった人の傷や痛みを延々と生み出し心の中の空白というのはずっと残り続けます。長く長くその街に暮らす人にも、傷が残り続けるのだということを皆さんにも考えてほしいと思います。これらは遠い国の戦争の話のように思えるかもしれませんが、日常のグリーンの向き合い方と相通じるものがあるのではないかと思います。

## 東日本大震災の被災地の暗闇と母の死

ここからは僕自身の経験してきたグリーンを皆さんにお話しします。

僕の家族は 6 人家族でした。母は東日本大震災の津波で命を落としました。姉と下の弟は震災前に既に亡くなっていましたが、父も母を亡くした心の痛みと向き合う過程で衰弱し、命を落とします。ただ、これからお伝えするのは、決して単にネガティブな感情ではありません。

2011 年 3 月 11 日、恐らくほとんどの方がその日の記憶があると思います。世界中のニュース番組の中で流れた黒い大きな津波が沿岸の町々をのみ込む様子に僕自身、想像をはるかに超える大災害が起きたのだと認識しました。これは父と母の命に関わる災害なんだと感じ、それからすぐに緊急帰国をし、3 月 13 日に東京に戻ってきました。東京の明かりというものも半分以上消えていて、スーパーにはほとんど食料品もないという状況の中、なんとか手配した車で、岩手を目指します。ほどなく父から電話があり再会を果たしました。勤務していた病院は津波にのまれましたが、4 階にいた父は何とか津波の引いたタイミングで屋上に避難することができ救助されたといえます。

ただ父に尋ねても母の行方はわからず、とにかく陸前高田へと車を走らせました。

その道中で目にした様子がこの写真の瓦礫です。つい 1 週間や 10 日ほど前までは誰かの日常の一部だったものです。陸前高田の市街地は壊滅的な状況でした。2 万数千人が住んでいた街ですが、それが日が暮れると日常の明かりが一つもないのです。いかに多くの日常の明かりが奪われてしまったのかと、とても怖かったことを覚えています。人魂を見たとの話を聞いても全然それが不思議に思えないぐらいに、被災地の後の暗闇というのは、死というものが満ちているようなそんな暗闇でした。

初めは生きた母を探していました。ただ、街を歩くと感じる潮の匂いに交じった人間の朽ちゆく臭い……。次第に生きた母ではなく、その母の遺体をなるべく早く見つけてあげる、そのために全力を尽くすようになっていました。

東日本大震災の犠牲者、2 万弱と言われていますが、その数字の陰には、愛する人を亡くした人の

悲しみや痛み、それを今も抱える人がいる。そう考えると、10 年以上たったとはいえ、その悲しみの大きさというのは、過去のことから簡単に捉えることのできるものではないということを想像していただけるのではないのでしょうか。

発災からおよそ 1 か月後、母の遺体と対面できました。一緒に連れて逃げようとした愛犬のリードをぎゅっと握り締めた母の遺体は腐敗により、生前の面影がほとんど残っていませんでしたが、それでも、やっと母を見つけることができたことにとっても安堵したことを覚えています。

ただ、いまだに 2 千人以上の方が見つかっていません。さようならということができないといった「あいまいな喪失」をいまだに感じている方々も多くいらっしゃいます。そう考えると、本当に早い時期に母の遺体が見つかったことは奇跡的なことだと思っています。

## 父の悲嘆

当時の父を映した写真もあります。震災前はとても気丈な強い父だったのですが、母を失って以降、毎日涙を流すようになりました。津波にのまれたトラウマで手が震えてしまい、医師としての仕事ができない弱い人間だと言うのです。日本各地からの頑張れという言葉に対し、頑張れない自分は駄目な人間かもしれないと自分を責める、そんな父の様子です。そういう掛け声そのものが悪いわけではありません。ただ、そのときに忘れてはならないのは、その当時、頑張れない人たちがいて、彼らは決して弱くて情けなかったわけではないということです。僕はこのとき、涙をこぼす父になぜカメラを向けシャッターを切ったのか。そのときはまだ言葉にできませんでしたが、何か弱々しい姿だけではなくて、何かかけがえのない美しいものがこの父の姿から感じられたように思います。

## 自分自身の悲嘆と自然からの気づき

それから数年、僕自身も心がぎゅーっと閉じていくような経験をしました。震災後 2 年もすると陸前高田の街からは瓦礫と一緒に、昔の面影もなくなっていました。ないと分かっているのに、そこに自分のこの心の空白を埋めてくれる何かがあるのではないかと何度も陸前高田に戻り、シャッターを切りました。ただ、その心の空白を埋めるものに出会えるわけでもなく、気がついたときには鬱の状態でした。音楽を聴いても何も感じず、物を食べても味を感じない。喪失のトラウマから人との出会いも恐ろしくなる。そんな数年間が続きました。

そうしたときに、僕自身は幸いなことに、ちょっとゆっくり休んだほうが良いよと、その悲しみと向き合う時間をいただけたんですね。それにより、少しずつ自分の心がまた息を吹き返す様子というものもゆっくりと感ずることができたんです。

岩手県のとある山の牧場を訪れた際の話です。その際、牧場長がこのような話をしてくださりました。冬って命のない季節に思えるだろうが違うんだと言うのです。

降り積もった雪は地面に接している側から山の地熱で解けていき、じわじわじわじわ時間をかけてしみ込んでいくからこそ、山の奥深くまで浸透し、この蓄えが春の芽吹き力になるんだと、冬は実は見えなくて命を育てている季節なんだと。それを聞いて僕ははっとしました。もしかしたら人間の心も同じようなりズムがあるのかもしれない。悲しみというものは、単に傷ついて弱々しくて意味のないものではなくて、

何かを育てている時間なのかもしれない、そう思い立ったのです。自然の何気ない木々やそこに存在する光景の美しさ、季節の変わり目に一瞬だけ垣間見える美しさや命をつなぐ生命のサイクルなども感じるようになりました。僕が見える世界が変わったからこそ、周りの世界から感じるいのちの恵みというものが変わっていったのだと思います。そうしたときに、再びあの父の写真と向き合う機会がありました。父は震災から数年後、心身ともに衰弱し、亡くなってしまいます。周囲から見ると、大切な伴侶を失い、苦しい晩年を過ごしたように見えるかもしれません。人間の悲嘆というものが、冬のような、次の季節に向けた何かを育てるものだとなれば、この父の悲しみはどのような意味があったのか。自身の命がしぼむほどに苦しむ—それほどまでに母のことを大切に思っていたという証でもあったのではないかと。そう気づいたときに、僕の中では父が死ぬ前に悲嘆と向き合った数年間というのは何かにつながるとも豊かなものだったのではないかと思うようになりました。

### 両親からの宝物

悲しみというのは次の季節のための芽吹きなのだとはいいたくありません。ただ、僕自身は母の死別を経験し、その悲嘆と向き合う父、そしてその父の死と向き合った中で、自分自身の中で見える世界というものが変わっていったのです。そうした苦しみと一緒にとてもかけがえのない宝物のようなものも両親から得たと思っています。グリーフというものを乗り越えて、克服して、過去のものにしてしまうのではなく、この宝物を大切に生きていけたらなと、そんなことを感じさせてくれた経験でした。

ご視聴された方々がこの話から何かを感じていただいたり、グリーフを抱えて生きる中で何かの支えになれば嬉しく思います。